藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2018年
3月
Vol.5

藤澤浮世絵館展示室

もくじ

展示紹介「藤沢と義経伝説」……………………………P1
「藤沢の義経伝説と史跡案内」…………………P2・P3
「義経×歌舞伎×浮世絵」……………………………P4
ONIKAGE 学芸員のページ／イベント報告ピックアップ……P5
展示予告／浮世絵こぼれ話／編集後記………………P6

歌川国芳「義経十九臣」

藤沢と義経伝説

会期 2018年2月23日（金）～4月15日（日）

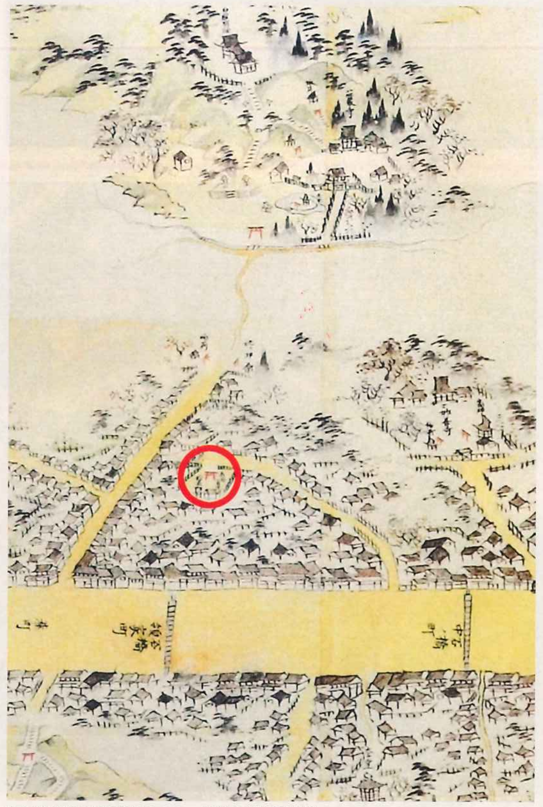
幼名「牛若丸」として親しまれ、多くの伝説や物語を生んだ悲劇の英雄「源義経」は、浮世絵の画題としても数多く取り上げられています。本展では、義経ゆかりの浮世絵とあわせて、藤沢に残る義経伝説を紹介します。

鎌倉時代の史書『吾妻鑑』には、義経が文治５年（1189）閏４月30日に衣川（岩手県平泉町）の館で自害したと書かれています。また、同書の６月13日の項には、腰越（鎌倉市）の浜での首実検（討った首が本当にその人物だったかを確かめること）のことが書かれていますが、浜に捨てられた義経の首は潮にのって川をさかのぼり、里人に拾われて藤沢宿内の井戸で清められたと伝えられています。また、金色の亀の背中に乗って運ばれてきたという伝説もあります。その霊が祀られているのが、藤沢の白旗神社です。また、義経の首は、夏の暑さの中を43日間かけて鎌倉に運ばれたため、誰の首か分からない状態になっていたとも言われ、それが偽首伝説となり、さらには生きて蝦夷から大陸に渡ったとされる義経北行伝説にもつながりました。

藤沢の義経伝説と史跡案内

江戸時代の文政13年（1830）に小川泰堂が著した藤沢の郷土誌『我棲里』には、「その頃藤沢の川辺に、金色の亀が泥にまみれた首を甲羅に乗せて来た。里の人たちが驚いて怪しんでいたところ、側にいた子どもが急に狂ったように肘を張り『我は、源義経なり薄命にして、讒言によって身は奥州高舘の露と消えるのみならず、首も捨てられてしまうとは悔しくてたまらない。汝等、よきに弔ってくれ』と言い終わって倒れた。人々は恐れて、これを塚にした。」と書かれています。

義経に関係する伝説・伝承・口碑は、様々なものが各地に存在していますが、死後のものはほとんどなく、藤沢に残された伝説は貴重といえます。小田急江ノ島線藤沢本町駅に近い白旗交差点のそばの公園の片隅に、伝源義経首洗井戸（①）と九郎判官源義経公之首塚碑（②）が残されています。また義経の首は、文治5年（1189）に近くの白旗神社（③）に葬られたとされ、同社は宝治3年（1249）に義経を祭神として合祀し、名称も白旗神社となったと伝えられています。


「東海道分間延絵図」（藤沢宿部分）
（図の上部が白幡神社、下部赤丸が首洗い井戸）

白旗神社の建てられている丘は、形が亀に似ているということで、昔は亀の尾山や亀形山などと呼ばれていたといわれます。義経の首を背に乗せて現れたという伝説の亀は、神社の建つ地形から、金色は義経のいた奥州の金からの発想ではないかという説もあります。

藤沢の旧宿場地域には、先に挙げた史跡のほか、白旗神社境内の義経松碑（松は亡失）、弁慶の力石、源義経公鎮霊碑（④）、荘厳寺の義経御位牌（⑤）、現中横須賀公園の弁慶塚（⑥）等が残されています。

義経が描かれている浮世絵館所蔵作品

歌川国芳「本朝武優鏡　源義経　武蔵坊弁慶」
（肖像の上部には、義経、弁慶の略歴、武勇が述べられています。）

歌川広重「義経一代記図会」
（北方へ逃れ大王となった義経）

江戸時代の道中記（観光案内）「東海道分間絵図」（⑦）（天保12年〔1841〕）には、藤沢宿に遊行寺と並んで白旗大明神が見え、上部に「白はた明神は義経の首 奥州より鎌倉へ送りしを実検の後 此所に納め祭りし社・弁慶が首塚は二丁ほど脇也」と記されています。

旧藤沢宿の義経関連史跡案内

① 首洗井戸

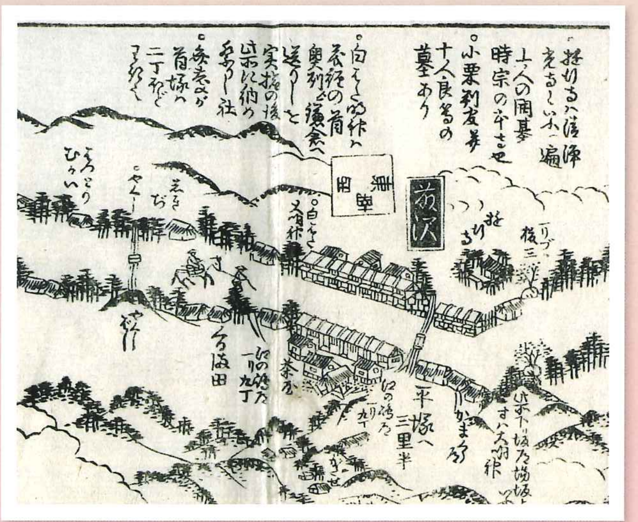
② 九郎判官源義経公之首塚碑

③ 白旗神社

④ 源義経公鎮霊碑

⑤ 荘厳寺 義経御位牌

⑥ 弁慶塚


⑦「東海道分間絵図」（藤沢宿）白旗神社の記載

義経×歌舞伎×浮世絵

江戸時代の一大娯楽である「歌舞伎」においても、源義経は人気者でした。義経のイメージは「高貴で、強くて、美男子」といったところで、二枚目の花形役者が演じるにはピッタリの役でした。そんな義経の登場する歌舞伎の作品を浮世絵と共に紹介します。

義経千本桜

歌舞伎の三大名作の一つに数えられる演目です。源平合戦で平家を討った後、兄である源頼朝に追われる身となった義経の逃避行を中心に、義経の命を狙う平家の残党たちや、周囲の人々におこるドラマを描いた物語。作品①②の通称「役者見立東海道」のシリーズには、登場人物の義経の家臣・源九郎忠信と静御前とが描かれています。ただし忠信の方は実は小狐が化けているという設定で、劇中では忠信が狐のような動きで踊りを舞う場面が見所の一つとなっています。

作品① 歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次の内 見附 しづか」

作品② 歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次の内 袋井 忠信」

一谷嫩軍記（熊谷陣屋）

源平合戦をテーマとし、義経とその家臣を中心としてドラマが展開する作品です。頻繁に上演されるのは三段目切「熊谷陣屋」で、歌舞伎の演目の中でも最も人気の高い演目の一つとなっています。「熊谷陣屋」では平家の武将・敦盛を討った義経の家臣「熊谷直実」に対して、義経が首実検を行うのですが、実は討ったのは敦盛ではなく、なんと熊谷直実の息子だった！しかもそれは義経の指示で・・・という複雑かつ大変奥の深い物語。作品③④は「役者見立東海道」より熊谷直実と義経です。

作品③ 歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内 藤枝 熊谷直実」

作品④ 歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内 藤枝 源義経」

勧進帳

能の安宅を元に創作された作品で、市川団十郎の「歌舞伎十八番」の一つにも数えられます。山伏の一行に扮装し、わずかな家臣とともに頼朝から逃げ延びている義経は、加賀国安宅の関所において富樫左衛門に引き留められるものの、義経の腹心・武蔵坊弁慶の機転と勇気により無事に関所を通されるという筋立てです。作品⑤には勧進帳を読み上げる弁慶と、それをじっと見据える富樫とその部下たちが描かれております。弁慶の持つ巻物は奈良東大寺の勧進帳に見立てた全く別の巻物ですが、弁慶は勧進帳の内容をよどみなく述べることで危機を乗り越えるのでした。

作品⑤ 歌川国芳「題名不詳（勧進帳）」

義経の登場する歌舞伎演目を紹介しましたが、実は義経自身が主人公である作品はあまりなく、義経周辺の人々が物語の中心となることが多いといえます。個性豊かなキャラクター達が周囲に集まるのも義経の魅力の一つ、といったところでしょうか。

ONIKAGE 学芸員のページ
浮世絵を伝えること 4

前回のONIKAGE学芸員のページで「多くの浮世絵は、汚れた紙の耳（縁）等を前の持ち主がカットしてしまった」ということをお話いたしました。今回はその「前の持ち主」について、少しお話しをしたいと思います。

浮世絵館には、画面が真ん中から二つ折りになっている東海道五十三次シリーズの浮世絵がございます（画像①）。はじめ、「大事な浮世絵を半分に折るなんざぁ、しんじられねぇ！」と思いましたが、何のために半分に折ったのかを考えてみますと、二つ折りにして製本すると、手元に置いたり持ち歩いたりするのに便利だったように思われるのでございます。この浮世絵を身近に置いて、折に触れては眺め、愛でていたのではないでしょうか。製本は悪いことばかりではなく、画面が空気に触れにくくなり、保存状態にも良いことがあるんでございますよ。浮世絵館では、綺麗に伸ばしてマット装をして、折り目が目立たないようにして展示するようひと工夫しております。その他に、ゴージャスな金砂子の折本に装訂された五十三次シリーズも有り（画像②）、五十三次の浮世絵が庶民にも富裕層にも愛されていたことが伺えるのでございます。

それから、弁才天が描かれた浮世絵の裏面に金泥が僅かに遺っているものを見つけたことがございます。仏画の技法である「裏彩色」のように、裏から金泥をあてると、透けて見える金色が弁才天の神々しさを引き立てたのではないかと思われます。前の持ち主さんは、芸事の上達を願っておられたのか、はたまたお金がワンサカ入ることを願っておられたのか・・・。

中には、防虫香や石鹸の匂いがする浮世絵もございます。当時の石鹸については、現在では防虫効果が無いことは知られておりますが、前の持ち主が浮世絵を大切に保管して後の世代に伝えることを願っていたことが伺えて、胸がキュンとする匂いでございます。

画像①

画像②

イベント報告ピックアップ

出張！浮世絵すり体験

- 5月27日（土）・28日（日） ふじさわ産業フェスタ
- 9月23日（土） ふじさわ市民まつり
- 10月8日（日） とつか宿場まつり
- 10月14日（土）・15日（日） 明治ふるさとまつり
- 11月18日（土）・19日（日） 手で触れて見る彫刻展
- 11月19日（日） 寒川町産業まつり
- 12月2日（土） MINTOMO交流会
- 12月17日（日） 藤沢市新庁舎内覧会

ワークショップ

- 9月2日（土）
  「ロウケツ染め体験」講師：島村智子氏（染色作家）

講 座

- 8月19日（土） 浮世絵サマーレクチャー
  特別企画「物語の中の藤沢・江の島」
  講師：渡邉晃氏（太田記念美術館主幹学芸員）
- 9月30日（土） 開館1周年記念「魅惑の浮世絵ワールドにようこそ」
  講師：斎藤文夫氏（川崎・砂子の里資料館長）
- 10月21日（土） 開館1周年記念「神奈川の浮世絵ー川崎・砂子の里資料館の作品を中心にー」
  講師：小池満紀子氏（川崎・砂子の里資料館理事）
- 平成30年1月20日（土） 浮世絵ウィンターレクチャー
  特別企画「北斎と北斎派」
  講師：月本寿彦氏（茅ヶ崎市美術館学芸員）

展示予告

浮世絵で春の江の島詣　会期：2018年4月21日（土）～6月10日（日）

藤沢のランドマークである江の島は、江戸時代にも多くの人が訪れる人気の参詣・観光の地でした。本展では、江の島へ集まる人々を描いた浮世絵や、貝細工などの江の島名物のお土産ものをご覧いただきます。

あわせて、美人画を代表する浮世絵師・喜多川歌麿の作品（「女織蚕手業草　十」、「江戸名物錦画耕作」他）を展示します。

歌川国貞（三代豊国）／二代広重
「諸国名所七里ヶ浜」

葛飾北斎
「題名不詳（貝屏風）」

喜多川歌麿
「女織蚕手業草　十」

喜多川歌麿
「江戸名物錦画耕作」

浮世絵こぼれ話 04

開館以来、浮世絵館のマスコットキャラクターとして親しまれている「おにかげ（鬼鹿毛）くん」ですが、おにかげくんは歌川芳員の「東海道五十三次内　藤沢」に描かれている馬をキャラクター化したものです。遊行寺を背景にして、藤沢の伝説上の人物である小栗判官と照手姫と一緒に鬼鹿毛が描かれています。人を秣（飼料）のように食べてしまう人食い馬の鬼鹿毛を、小栗判官が見事に乗りこなし、碁盤の上に四つ足で立たせたという物語にちなんで、小栗判官と鬼鹿毛が碁盤を挟んで仲良く碁を打っている場面が描かれています。鹿毛とは、馬の毛色の種類のことで、茶褐色の毛色の馬という意味です。そのお墓は遊行寺の長生院にありますが、静岡県や茨城県など、鬼鹿毛の伝説が伝わっている各地にもそれぞれお墓があります。武田信玄の父・信虎も、愛馬に「鬼鹿毛」という名前をつけていたそうです。

歌川芳員「東海道五十三次内　藤沢」

編集後記

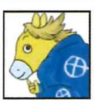
藤沢と源義経の不思議な関係についての展示はいかがでしたでしょうか。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の中で弥次喜多が藤沢宿で話題にするほど、義経の首の伝説は江戸時代から有名でした。藤澤浮世絵館では、これからも郷土の歴史や伝承がみられる浮世絵と資料の紹介に努めてまいります。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台２丁目２番２号ココテラス湘南７階
【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）
※その他、展示替えのための休館日がございます
【ＨＰ】 藤沢市藤澤浮世絵館 で検索

キュン♡と藤沢 するまち。



facebook：藤澤浮世絵館
公式アカウント
⇦このマークが目印です。「いいね！」お願いします。